

J.S.バッハ：フルートと通奏低音のためのソナタ BWV1034

自筆譜がなく、作曲年代は諸説あるが、ケーテン宮廷楽長時代（1717～23）の中頃とされる。4楽章からなり、緩／急／緩／急の教会ソナタ形式を採用している。第1楽章は、哀愁を帯びたフルートの旋律と通奏低音の静かな対話が印象的。第2楽章は、軽快な主題展開のあと、長めの間奏が続く。第3楽章は、通奏低音のシンプルな前奏を受けて、フルートが気品を湛えた旋律を歌う。第4楽章は、潑刺とした舞曲調。小気味よい掛け合いが聴きどころ。

J.S.バッハ：半音階的幻想曲とフーガ BWV903

作曲年代は定かでないが、おそらくケーテン時代の1719年頃とされる。バッハのクラヴィーア作品のなかでも人気があり、演奏機会も多い。「幻想曲」と「フーガ」の2つのパートからなり、「レチタティーヴォ」と記された幻想曲の後半ではめまぐるしく転調する。フーガは半音階的な書法による三声のフーガとなっている。

テレマン：無伴奏フルートのための12のファンタジア 第10番 TWV40:11

「無伴奏フルートのための12のファンタジア」は1732～33年、テレマンのハンブルク時代の作とされる。フルート奏者にとって重要なレパートリーであり、技術的な練習曲のみならず、演奏会用の作品としても価値を有している。

ファンタジア第10番は、典型的なバロック組曲の構成に則り、3つの楽章からなる。第1楽章はイタリア風のコレントで書かれ、流れるような8分音符の動きが特徴的。第2楽章はガヴオットにもとづいているが、より速いテンポで演奏されることが多い。第3楽章は落ち着いた8分の3拍子のメヌエット。

J.S.バッハ：フルートとオブリガート・チェンバロのためのソナタ BWV1030

ケーテン時代にト短調の曲として書かれ、ライプツィヒ時代（1735年頃）にロ短調に改められた。バッハのフルート・ソナタのなかでも人気が高い。第1楽章アンダンテは、冒頭の旋律が有名。第2楽章ラルゴ・エ・ドルチェは、心に染みる主題が印象的。第3楽章は、前半のプレストから後半はアレグロのジーグへと続いて、曲を締めくくる。

J.S.バッハ：無伴奏チェロ組曲 第1番 BWV1007

《無伴奏チェロ組曲》（全6曲）が書かれた年代は、ケーテン時代の前期と推定されている。この「第1番」は、ト長調というチェロの運指に合った調性が、伸びやかな響きを生み出す。冒頭のプレリュードは本組曲のなかでも最も有名な楽章で、間断なく続く16分音符の流れがその背後で進む和声を浮き彫りにする。第2曲は安らぎに満ちたアルマンド、第3曲は急速な3拍子によるクーラント、第4曲は優雅なサラバンド、第5曲には2つのメヌエットが用いられている。そして第6曲の軽快な短いジーグで曲を閉じる。

J.S.バッハ：フルートと通奏低音のためのソナタ BWV1035

作曲年は諸説あるが、ケーテン時代の1720年頃とされる。4楽章構成で、第1楽章は、柔らかくゆったりとした旋律に魅力があふれている。第2楽章は、流麗な冒頭モチーフが印象深い。第3楽章は「シチリア風」という意味の古い舞曲で、ためらいがちに揺らぐようなリズムが特徴的。第4楽章は潑刺とした音楽で、明るく曲を閉じる。